

第14回 明治大学中央図書館企画展示
明治大学特別功労賞受賞記念

倉橋由美子展



会場：明治大学中央図書館ギャラリー

会期：2006年6月5日～7月6日

後援：明治大学連合父母会、明治大学校友会、連合駿台会

協力：新潮社、講談社、宝島社、共同通信社、日本著作権輸出センター

「倉橋由美子展」開催にあたって

図書館長・文学部教授
原 道生

このたび、明治大学では、故倉橋由美子氏に対し、本学の榮譽を高める上で多大な貢献を果たした卒業生に贈られる「明治大学特別功労賞」を贈呈することと致しました。

本特別展示会も、そうした同氏顕彰の企ての一環として、開催されるものであります。

周知のように、倉橋氏の文学活動の原点は、本学文学部文学科仏文学専攻4年次在学中に発表した同氏の作品『パルタイ』が、1960年1月に、明治大学新聞主催の第4回明治大学学長賞を受賞したことにより、有望な新人作家としての鮮烈なデビューを果たしたことにあったといつてよいでしょう。そして、それ以後、同氏は、昨2005年6月10日の思いがけない逝去に至るまでの約半世紀間にわたり、一貫して著述活動に専念し、小説・エッセイ・翻訳などの多方面にわたって、極めて質の高い、歴大な作品群を公けにしています。

ちなみに、その代表的な作品としては、小説では、上記『パルタイ』の他に、『暗い旅』(1961)、『聖少女』(1965)、『スミヤキストQの冒険』(1969)、『夢の浮橋』(1971)、『大人のための残酷童話』(1984)、『アマノン国往還記』(1986)、『よもつひらさか往還』(2002)等、エッセイでは、『わたしのなかのかれへ』(1970)、『あたりまえのこと』(2001)等、翻訳では、『ぼくを探しに』(1977)や生涯最後の著作となった『新訳 星の王子さま』(2005)等々、まさに枚挙にいとまがありません。それらは、いずれも、倉橋氏独自の知的な作風、すなわち、『源氏物語』や能、俳諧等といった日本の伝統文化についての深い教養、さらにはギリシャ悲劇や漢詩文に関する広い知識などに基づく奔放な想像力を自在に駆使しつつ、虚構の世界を反リアリズム的に展開させるという同氏固有の魅力的な方法を通して、現代日本文学に大きな刺激を与え、かつ、高い評価を受けるものとなっています。同氏に対して、1961年に第12回女流文学者賞、1962年に第3回田村俊子賞、1987年に第15回泉鏡花文学賞が贈られていることは、その証左に他ならないといえるでしょう。

本展示会では、『パルタイ』が学長賞受賞作として掲載された際の『明治大学新聞』を始めとして、国内外で刊行された同氏の全著作および関連諸資料を網羅し、また、御遺族やお知り合いの方々の御提供による遺品類をも展示することを通じて、多彩な倉橋氏の文学活動のすべてが一望出来ることになるように努めました。ささやかではありますが、出身校ならではの密度の濃いものになり得ているのではないかと自負しております。

この催しが契機となって、倉橋文学に対する大方の関心が深まり、さらに今後の日本文学の展開に大きな示唆をもたらすものとなることを期待して止みません。

折しも同氏の一周忌を迎えるに当たり、故人の御冥福をお祈りするとともに、今回の企画に対する御遺族の御厚情に感謝申し上げる次第です。

倉橋由美子 略年譜

- 1935（昭和10）年10月10日 高知県香美郡土佐山田町（現・香美市）に生まれる。
- 1954（昭和29）年 土佐高等学校卒業、京都女子大学国文科に入学。
医師を目指し、予備校に通う。
- 1955（昭和30）年 日本女子衛生短期大学別科歯科衛生士コースに入学。
- 1956（昭和31）年 日本女子衛生短期大学別科卒業、歯科衛生士国家試験に合格。
明治大学文学部文学科仏文学専攻に入学。
- 1959（昭和34）年 「雑人撲滅週間」が第三回明治大学学長賞佳作第二席となる。
- 1960（昭和35）年 「バルタイ」が第四回明治大学学長賞を受賞。選者・平野謙が「文芸時評」（『毎日新聞』）で紹介したため『文學界』に転載される。その後、芥川賞の候補作として、『文藝春秋』に再転載された。文藝春秋から、『バルタイ』を刊行する。
明治大学卒業。同大学院文学研究科に入学。
「非人」「貝のなか」などの短編を次々に発表。
- 1961（昭和36）年 『バルタイ』で女流文学者賞を受賞。『暗い旅』を東都書房より刊行。『暗い旅』論争が起こる。
- 1962（昭和37）年 父の急逝により帰郷。大学院を退学。
- 1963（昭和38）年 第3回田村俊子賞を受賞。
- 1964（昭和39）年 熊谷富裕と結婚。
- 1965（昭和40）年 フルブライト英語研修生となり上京。『聖少女』を刊行。
- 1966（昭和41）年 渡米。アイオワ州立大学大学院 Creative Writing Courseに入学。
『妖女のように』を刊行。
- 1967（昭和42）年 帰国。神奈川県中郡伊勢原町（現・伊勢原市）に居を構える。
- 1968（昭和43）年 長女まどか出産。『反悲劇』シリーズを『文藝』に掲載開始。
- 1969（昭和44）年 三年ぶりの書き下ろし長編『スミヤキストQの冒険』を刊行。
- 1970（昭和45）年 『ヴァージニア』、初エッセイ集『わたしのなかのかれへ』を刊行。
- 1971（昭和46）年 次女さやか出産。『夢の浮橋』を刊行。
- 1972（昭和47）年 第二エッセイ集『迷路の旅人』を刊行。家族でポルトガルに住む。
- 1973（昭和48）年 写真集『アイオワ静かなる日々』を刊行。
- 1974（昭和49）年 ポルトガルでクーデターが起こり帰国。
- 1975（昭和50）年 翌年にかけて『倉橋由美子全作品』（全8巻）を刊行。
- 1977（昭和52）年 シェル・シルヴァスタイン『ぼくを探しに』で初の翻訳に挑む。以後、数多くの翻訳を手がける。
- 1979（昭和54）年 第三エッセイ集『磁石のない旅』を刊行。
- 1980（昭和55）年 10年ぶりの長編『城の中の城』を刊行。
- 1984（昭和59）年 『おとなのための残酷童話』を刊行。
- 1985（昭和60）年 『シュンボシオン』を刊行。
- 1986（昭和61）年 『アマノン国往還記』を書き下ろし刊行。翌年、同書で泉鏡花文学賞受賞。
第四エッセイ集『最後から二番目の毒想』を刊行。
- 1987（昭和62）年 『ボボイ』を刊行。
- 1989（平成元年）年 『交歓』、『夢の通り路』を刊行。
- 1996（平成8）年 第五エッセイ集『夢幻の宴』を刊行。
- 1997（平成9）年 静岡県田方郡中伊豆町（現・伊豆市）に移り住む。
- 2001（平成13）年 自身の小説論をまとめた最後のエッセイ集『あたりまえのこと』を刊行。
- 2002（平成14）年 『よもつひらさか往還』を刊行。
- 2003（平成15）年 『老人のための残酷童話』を刊行。
- 2005（平成17）年6月10日 拡張型心筋症により永眠。享年69歳。
没後に、『新訳 星の王子さま』、書評集『偏愛文学館』が刊行される。

展示リスト

所蔵先

//H : 中央図書館、//W : 和泉図書館、
//S : 生田図書館、//HZ : 生田保存書庫
その他の記述は借用先、空欄は非展示

著書（単行本）

	書名	出版社	出版年	所蔵先
1	バルタイ	文藝春秋新社	1960.8	913.6/211//H 913/K616-1//W MB100/KU13-1//W
2	婚約	新潮社	1961.2	090.4/K42-46//H
3	人間のない神	角川書店	1961.4	913.6/238//H 090.4/K42-7//H
4	暗い旅	東都書房	1961.10	090.4/K42-38//H
5	聖少女	新潮社	1965.9	090.4/K42-99//H 913/K16-2//W
6	妖女のように	冬樹社	1966.1	090.4/K42-85//H 913/K16-3//W
7	蠍たち	徳間書店	1968.10	090.4/K42-98//H 913/K16-4//W
8	スマヤキストQの冒険	講談社	1969.4	090.4/K42-1//H
9	暗い旅	学芸書林	1969.12	090.4/K42-23//H
10	ヴァージニア	新潮社	1970.3	913.6/349//H 090.4/K42-103//H
11	わたしのなかのかれへ 全エッセイ集	講談社	1970.3	090.4/K42-51//H
12	悪い夏(角川文庫)	角川書店	1970.5	090.4/K42-57//H
13	人間のない神	徳間書店	1971.3	090.4/K42-42//H
14	夢の浮橋	中央公論社	1971.5	090.4/K42-39//H
15	婚約(新潮文庫)	新潮社	1971.6	090.4/K42-5//H
16	反悲劇	河出書房新社	1971.6	090.4/K42-24//H
17	暗い旅(新潮文庫)	新潮社	1971.11	090.4/K42-86//H
18	現代の文学 ³² 倉橋由美子	講談社	1971.12	090.4/K42-14//H 918/258//W
19	迷路の旅人	講談社	1972.5	914.6/161//H HE/12//H
20	スマヤキストQの冒険(講談社文庫)	講談社	1972.6	090.4/K42-11//H
21	ヴァージニア(新潮文庫)	新潮社	1973.5	BS/KU4-3//H 090.4/K42-10//H
22	わたしのなかのかれへ(上)(講談社文庫)	講談社	1973.9	090.4/K42-8//H
23	わたしのなかのかれへ(下)(講談社文庫)			
24	夢の浮橋(中公文庫)	中央公論社	1973.10	090.4/K42-13//H
25	アイオワ 静かなる日々	新人物往来社	1973.11	090.4/K42-66//H
26	バルタイ(文春文庫)	文藝春秋	1975.1	090.4/K42-2//H
27	迷路の旅人(講談社文庫)	講談社	1975.6	090.4/K42-9//H
28	妖女のように(新潮文庫)	新潮社	1975.7	090.4/K42-28//H
29	倉橋由美子全作品 1 バルタイ・雑人撲滅週間	新潮社	1975.10	913.608/22//H
30	倉橋由美子全作品 2 人間のない神・どこにもない場所		1975.11	HE/14//H~
31	倉橋由美子全作品 3 暗い旅・真夜中の太陽		1975.12	HE/21//H
32	倉橋由美子全作品 4 妖女のように・蠍たち		1976.1	913/K16-6//W
33	倉橋由美子全作品 5 聖少女・結婚		1976.2	
34	倉橋由美子全作品 6 ヴァージニア・長い夢路		1976.3	
35	倉橋由美子全作品 7 反悲劇・豊魂		1976.4	
36	倉橋由美子全作品 8 夢の浮橋・腐敗		1976.5	
37	反悲劇(河出文芸選書)	河出書房新社	1976.5	090.4/K42-49//H
38	迷宮	文藝春秋	1977.4	HE/13//H
39	夢のなかの街(新潮文庫)	新潮社	1977.4	090.4/K42-12//H
40	人間のない神(新潮文庫)	新潮社	1977.8	090.4/K42-4//H
41	バルタイ(新潮文庫)	新潮社	1978.1	090.4/K42-31//H BS/KU4-7//H
42	磁石のない旅	講談社	1979.2	090.4/K42-104//H 914.6/423//H
43	反悲劇(新潮文庫)	新潮社	1980.8	090.4/K42-37//H
44	城の中の城	新潮社	1980.11	090.4/K42-87//H 913.6/462//H HE/11//H
45	聖少女(新潮文庫)	新潮社	1981.9	BS/KU4-9//H
46	大人のための残酷童話	新潮社	1984.4	090.4/K42-3//H
47	城の中の城(新潮文庫)	新潮社	1984.8	090.4/K42-41//H
48	倉橋由美子の怪奇掌篇	潮出版社	1985.2	090.4/K42-44//H
49	シュンボシオン	福武書店	1985.11	913.6/1149//H 090.4/K42-21//H
50	最後から二番目の毒想	講談社	1986.4	090.4/K42-47//H
51	アマノン国往還記	新潮社	1986.8	090.4/K42-25//H

	書名	出版社	出版年	所蔵先
52	ポポイ	福武書店	1987.9	090.4/K42-50//H
53	スミヤキストQの冒険(講談社文芸文庫)	講談社	1988.2	090.4/K42-52//H
54	倉橋由美子の怪奇掌篇(新潮文庫)	新潮社	1988.3	BS/KU4-11//H 090.4/K42-29//H
55	シュンボシオン(新潮文庫)	新潮社	1988.12	090.4/K42-40//H
56	交歓	新潮社	1989.7	090.4/K42-22//H
57	夢の通ひ路	講談社	1989.11	090.4/K42-43//H
58	アマノン国往還記(新潮文庫)	新潮社	1989.12	090.4/K42-30//H
59	大人のための残酷童話(カセットブック 大谷直子朗読)	新潮社	1990.1	
60	ポポイ(新潮文庫)	新潮社	1991.4	090.4/K42-27//H
61	幻想絵画館	文藝春秋	1991.9	090.4/K42-77//H
62	交歓(新潮文庫)	新潮社	1993.5	BS/KU4-15//H
63	夢の通ひ路(講談社文庫)	講談社	1993.11	090.4/K42-26//H
64	夢幻の宴	講談社	1996.2	090.4/K42-6//H
65	反悲劇(講談社文芸文庫)	講談社	1997.6	090.4/K42-84//H
66	大人のための残酷童話(新潮文庫)	新潮社	1998.8	090.4/K42-32//H BS/KU4-16//H
67	毒薬としての文学 倉橋由美子エッセイ選(講談社文芸文庫)	講談社	1999.7	090.4/K42-34//H
68	あたりまえのこと	朝日新聞社	2001.11	090.4/K42-16//H
69	よもつひらさか往還	講談社	2002.3	090.4/K42-17//H
70	バルタイ 紅葉狩り 倉橋由美子短篇小説集(講談社文芸文庫)	講談社	2002.11	新書・文庫コーナー/H
71	老人のための残酷童話	講談社	2003.9	090.4/K42-15//H
72	暗い旅(Shincho On Demand Books)	新潮社	2003.10	090.4/K42-90//H
73	あたりまえのこと(朝日文庫)	朝日新聞社	2005.2	090.4/K42-36//H
74	よもつひらさか往還(講談社文庫)	講談社	2005.3	090.4/K42-35//H
75	偏愛文学館	講談社	2005.7	902.3/23//H 090.4/K42-45//H 902.3/28//W
76	大人のための怪奇掌編	宝島社	2006.2	913.6/1156//H 090.4/K42-88//H 913.6/150//W
77	老人のための残酷童話(講談社文庫)	講談社	2006.6	講談社提供

翻訳書

	書名	原書名	原作者	出版社	出版年	所蔵先
1	ぼくを探しに	The missing piece	シェル・シルヴァスタイン	講談社	1977.4	090.4/K42-62//H
2	ぼくを探しに(新装版)	The missing piece	シェル・シルヴァスタイン	講談社	1979.4	
3	歩道の終るところ	Where the sidewalk ends	シェル・シルヴァスタイン	講談社	1979.6	090.4/K42-60//H
4	嵐が丘にかえる 第1部	Return to Wuthering Heights	アンナ・レストレンジ	三笠書房	1980.10	090.4/K42-58//H
5	嵐が丘にかえる 第2部					
6	続ぼくを探しに ビッグ・オーとの出会い	The missing piece meets the Big O	シェル・シルヴァスタイン	講談社	1982.7	090.4/K42-62//H
7	屋根裏の明かり	A light in the attic	シェル・シルヴァスタイン	講談社	1984.1	090.4/K42-59//H
8	クリスマス・ラブ 七つの物語	Seven stories of Christmas love	レオ・プスカリア	JICC出版局	1989.12	090.4/K42-56//H
9	イクトミと大岩 (アメリカ・インディアンの民話1)	Iktomi and the boulder	ポール・ゴブル	宝島社	1993.5	090.4/K42-55//H
10	イクトミと木いちご (アメリカ・インディアンの民話2)	Iktomi and the berries	ポール・ゴブル	宝島社	1993.9	090.4/K42-55//H
11	オオカミと羊	Quand le berger dort...	アンドレ・ダーハン	宝島社	1993.11	
12	イクトミとおどるカモ (アメリカ・インディアンの民話3)	Iktomi and the ducks	ポール・ゴブル	宝島社	1994.2	090.4/K42-55//H
13	レオンのぼうし	Follow that hat!	ピエール・プラット	宝島社	1994.6	090.4/K42-53//H
14	イクトミとしゃれこうべ (アメリカ・インディアンの民話4)	Iktomi and the buffalo skull	ポール・ゴブル	宝島社	1995.2	090.4/K42-55//H
15	ラブレター 返事のこない160通の手紙 *古屋美登里との共訳	Letter to my husband : notes about mourning & recovery	ジル・トルーマン	宝島社	1995.4	090.4/K42-54//H
16	クロウチーフ	Crow chief	ポール・ゴブル	宝島社	1995.10	
17	そのために女は殺される (『愛の殺人(ハヤカワ・ ミステリ文庫)』所収)	For what she had done	シェル・シルヴァスタイン	早川書房	1997.5	090.4/K42-70//H
18	人間になりかけたライオン	Lafcadio, the lion who shot back	シェル・シルヴァスタイン	講談社	1997.11	090.4/K42-19//H
19	天に落ちる	Falling up	シェル・シルヴァスタイン	講談社	2001.10	090.4/K42-18//H
20	クリスマス・ラブ 七つの物語 (宝島社文庫)	Seven stories of Christmas love	レオ・プスカリア	宝島社	2001.11	090.4/K42-33//H
21	新訳 星の王子さま	Le petit prince	アントワーヌ・ド・ サンテグジュペリ	宝島社	2005.7	090.4/K42-20//H 653.7/53//W
22	新訳 星の王子さま (宝島社文庫)	Le petit prince	アントワーヌ・ド・ サンテグジュペリ	宝島社	2006.6	宝島社提供

海外出版

	原書名・「作品名」	翻訳書名・収録書名	言語	出版社	出版年	所蔵先
1	「河口に死す」収録	Contemporary Japanese literature : an anthology of fiction, film, and other writing since 1945	英語	A.Knopf	1977	日本著作権輸出センター
2	「河口に死す」収録	Contemporary Japanese literature : an anthology of fiction, film, and other writing since 1945	英語	C.E. Tuttle	1978	
3	スミヤキストQの冒険	The adventures of Sumiyakist Q	英語	Univ. of Queensland Press	1979	日本著作権輸出センター
4	「バルタイ」収録	This kind of woman : ten stories by Japanese women writers, 1960-1976	英語	Stanford Univ. Press	1982	090.4/K42-82//H
5	「バルタイ」収録	This kind of woman : ten stories by Japanese women writers, 1960-1976	英語	Perigee Books	1984	
6	「巨刹」収録	The Showa anthology : modern Japanese short stories. vol. 2	英語	Kodansha International	1985	913/346//W
7	「バルタイ」収録	Les paons ; La grenouille ; Le moine-cigale : et dix autres recits (1955-1970)	仏語	P.Picquier	1988	
8	「腐敗」収録	Antologia de la narrativa japonesa de posguerra	スペイン語	Premia Editora	1989	
9	「向日葵の家」 「神神がゐたころの話」	Das Haus mit den Sonnenblumen : zwei Antitragödien	独語	Theseus Verlag	1991	
10	「バルタイ」収録	Les paons ; La grenouille ; Le moine-cigale	仏語	P.Picquier	1991	
11	大人のための残酷童話	残酷の成人童話	中国語	太雅	1992	
12	鬼女の面	鬼女面具	中国語	萬象圖書股份有限公司	1991	
13	「夏の終り」収録	Mondscheintropfen : japanische Erzählungen, 1940-1990	独語	Theseus Verlag	1993	日本著作権輸出センター
14	「醜魔たち」収録	Autumn wind and other stories	英語	C.E. Tuttle	1994	
15	「花の下」収録	O canto da terra : antologia do conto cotemporaneo Japones	ポルトガル語	Movimento	1994	
16	「かぐや姫」「白雪姫」収録	Japan forteller	ノルウェイ語	De norske Bokklubbene	1996	日本著作権輸出センター
17	「巨刹」収録	Antologija suvremene japanske novele	セルボ・クロアチア語	Adamić	1997	日本著作権輸出センター
18	「バルタイ」収録	Les paons ; La grenouille ; Le moine-cigale	仏語	P.Picquier	1998	
19	「宇宙人」「恋人同士」ほか	The woman with the flying head and other stories	英語	M.E. Sharpe	1998	090.4/K42-93//H
20	「黒猫の家」収録	The year's best fantasy and horror : twelfth annual collection	英語	St. Martin's Press	1999	
21	大人のための残酷童話	残酷童話	中国語	新雨出版社	1999.4	日本著作権輸出センター
22	「バルタイ」収録	Icke brännbara sopor	スウェーデン語	En bok för alla	2000	日本著作権輸出センター
23	倉橋由美子の怪奇掌編	倉橋由美子の怪奇故事	中国語	新雨出版社	2001.2	日本著作権輸出センター
24	聖少女	聖少女	中国語	新雨出版社	2002.6	日本著作権輸出センター
25	アマノン国往還記	亞瑪諾國往還記	中国語	新雨出版社	2002.8	積田正弘氏蔵
26	アマノン国往還記	Die Reise nach Amanon : Roman	独語	be.bra-Verlag	2006	日本著作権輸出センター
27	「河口に死す」収録	Contemporary Japanese literature : an anthology of fiction, film, and other writing since 1945	英語	Cheng & Tsui Co.	2005	090.4/K42-97//H

図書、雑誌収録著作

	作品名・論題	収録書名・「誌名」巻(号)	出版社	出版年	所蔵先
1	バルタイ	「明治大学新聞」839	明治大学新聞学会	1960.1.14	N/16//H M/176//H
2	受賞の責任を痛感	「明治大学新聞」844	明治大学新聞学会	1960.3.3	N/16//H M/176//H
3	バルタイ	「文學界」	文藝春秋	1960.3	P905/1//H P905/3//W
4	希望座談会 女子新入生がみた 学園生活 *大学院文学研究科1年	「明治大学新聞」856	明治大学新聞学会	1960.6.16	N/16//H M/176//H
5	雑人撲滅週聞	「明治大学新聞」862	明治大学新聞学会	1960.7.21	N/16//H M/176//H
6	バルタイ	文學選集(昭和36年版)26	講談社	1961.12	090.4/K42-94//H
7	宇宙人	文學選集(昭和40年版)30	講談社	1965.5	090.4/K42-94//H 913/48//W
8	バルタイ、囚人、宇宙人	われらのぶんがく21	講談社	1966.10	918/169//W
9	バルタイ	現代文学大系66 現代名作集4	筑摩書房	1968.8	918.6/96//HZ
10	推薦の言葉	ノーマン・メイラー全集出版案内	新潮社	1969	積田正弘氏蔵
11	作家志望のQさんへの手紙	「駿河台文学」1	明大文科の会	1972.5	P905/139//H 090.8/125//H
12	夢の浮橋、バルタイ、ヴァージニア	昭和文学全集 第24巻	小学館	1988.8	918/457//W
13	バルタイ	全集・現代文学の発見 第4巻 政治と文学	學藝書林	1986.11	918/190//W 918/43//S
14	合成美女	世界のSF全集35 日本のSF(短編集)現代篇	早川書房	1969.4	090.4/K42-65//H
15	蠅たち	ブラック・ユーモア選集 第5巻 日本篇(短篇集)	早川書房	1970.4	090.4/K42-83//H
16	白い髪の童女	文學選集(昭和45年版)35	講談社	1970.5	913.608/12//H
17	蠅たち	日本の文学 名作集4	中央公論社	1970.10	HE/912//H
18	エロ映画考	現代日本映画論大系 第四巻 土着と近代の相剋	冬樹社	1971.2	778.21/8//H
19	恋人同士	暗黒のメルヘン(滋澤龍彦編)	立風書房	1971.5	090.4/K42-63//H
20	河口に死す	文學選集(昭和46年版)36	講談社	1971.6	913/48//W
21	「反墳谷雄高」論	墳谷雄高作品集6 随想集	河出書房新社	1972.2	918.6/134//H 918/276//W 918/65/S

	作品名・論題	収録書名・「誌名」巻(号)	出版社	出版年	所蔵先
22	坂口安吾	無頼文学研究(叢書近代文学研究)	三弥井書店	1972.10	910.2/81//H 910/1460//W
23	バルタイ	現代日本文学大系92	筑摩書房	1973.3	918/208//W 918/41//S
24	バルタイ、ヴァージニア	現代の女流文学 第1巻	毎日新聞社	1974.9	090.4/K42-81//H
25	悪い學生の辨	平野謙全集 第9巻付録	新潮社	1975.5	910/1773//W 910.8/5//DZ
26	蠍たち	ブラック・ユーモア選集 第5巻日本篇 短篇集 改訂版	早川書房	1976	090.4/K42-83//H
27	土佐人について	ふるさとの旅路 日本の叙情12 四国・瀬戸内海	趣味と生活	1976.8	291/354//W
28	女の精神	水上勉全集 月報10	中央公論社	1977.3	918/325//W
29	『史記』と『論語』	貝塚茂樹著作集 付録8	中央公論社	1977.7	222.008/5//H 222/263//W
30	カフカと私	世界文学全集33 カフカ	学習研究社	1977.12	積田正弘氏蔵
31	倉橋由美子氏評	安部公房『密会』箱裏	新潮社	1977.12	HE/50//H
32	無気味なものと美しいもの	現代女子全集 月報6	新潮社	1978.2	918.68/30//H
33	バルタイ	現代短篇名作選6(講談社文庫)	講談社	1980.1	090.4/K42-78//H
34	神童の世界	谷崎潤一郎全集 月報8	中央公論社	1981.12	918/401//W
35	夢の浮橋、バルタイ、宇宙人、 長い夢路、白い髪の童女	筑摩現代文学大系 82 曾野綾子 倉橋由美子集	筑摩書房	1981.12	090.4/K42-64//H
36	恋人同士	ネコ・ロマンチズム(吉行淳之介編)	青銅社	1983.5	090.4/K42-76//H
37	骨だけの文章	私の文章修業(朝日選書247)	朝日新聞社	1984.2	816/149//W 816/39//S
38	知的魔力の泉	知の広場 大学生生活の道標	明治大学	1988.3	090.5/175//H
39	残酷な童話	グリム童話とメルヘン街道	くもん出版	1985.4	943/128//H
40	靈魂	日本幻想文学大全 下 幻視のラビリンス	青銅社	1985.9	913.6/536//H
41	百聞雑感	内田百閒全集 月報17	福武書店	1988.3	918.6/340//H 918/456//W
42	紅葉狩り	女が35歳で	マガジンハウス	1989.6	090.4/K42-92//H
43	先生・評論家・小説家・ 中村光夫先生	世にあるも世を去るも 中村光夫追悼文集	中村光夫先生を 偲ぶ会	1987.9	049.1/407//H 090.4/N1-9//H
44	愛と結婚に関する六つの手紙	ポケットアンソロジー 恋愛について (中村真一郎編),(岩波文庫別冊9)	岩波書店	1989.11	新書・文庫コーナー//H BIB/E9//W BIB/E9-1//S
45	ヴァンピールの会	血と薔薇のエクスタシー 吸血鬼小説傑作集	幻想文学出版局	1990.5	090.4/K42-80//H
46	恋人同士	暗黒のメルヘン(澁澤龍彦編) 新装版	立風書房	1990.7	090.4/K42-63//B/H
47	靈魂	短・怨念14=妖気 幻想・怪奇名作選	星雲社	1993.11	090.4/K42-61//H
48	バルタイ	短編女性文学 現代	おうふう	1993.11	913.6/542//H
49	夢のなかの街	ふるさと文学館 第45巻 高知	ぎょうせい	1993.12	918.6/424//H
50	夕顔	鬼譚(夢枕獺編著)	立風書房	1993.12	090.4/K42-79//H
51	宇宙人	夢・幻視13=神秘 幻想・怪奇名作選	星雲社	1994.10	090.4/K42-73//H
52	層雲峡から阿寒への道	ふるさと文学館 第2巻 北海道	ぎょうせい	1995.6	918.6/424//H
53	バルタイ、ヴァージニア、 白い髪の童女(『反悲劇』より)、 磁石のない旅(抄)	女性作家シリーズ14 竹西寛子、倉橋由美子、 高橋たか子	角川書店	1998.1	090.4/K42-48//H
54	恋人同士	暗黒のメルヘン(澁澤龍彦編)(河出文庫)	河出書房新社	1998.7	090.4/K42-69//H
55	鬼女の面	女流ミステリー傑作選誘惑(結城信孝編)(徳間文庫)	徳間書店	1999.1	090.4/K42-71//H
56	英雄の死	近代作家追悼文集42 三島由紀夫	ゆまに書房	1999.2	910/3877//W
57	ヴァンピールの会	屍鬼の血族(東雅夫編)	桜桃書房	1999.4	090.4/K42-75//H
58	『源氏物語』の魅力	批評集成・源氏物語 第3巻 近代の批評	ゆまに書房	1999.5	913.3/85//H 913.3/7//W
59	黒猫の家	怪猫鬼談(東雅夫編)	桜桃書房	1999.11	090.4/K42-74//H
60	地獄の一形式としての俳句	齋藤慎爾全句集	河出書房新社	2000.3	911.36/327//H
61	花の下	櫻憑き 異形コレクション綺賓館	光文社	2001.4	090.4/K42-72//H
62	死んだ眼	戦後短篇小説再発見9 政治と革命 (講談社文芸文庫)	講談社	2002.2	新書・文庫コーナー//H BIB/E9//W BIB/E9-1//S
63	評伝的解説 島尾敏雄	近代文学作品論集成18 島尾敏雄 『死の棘』作品論集(志村有弘編)	クレス出版	2002.12	913.6/96//W
64	月の都	短歌殺人事件 31音律のラビリンス 齋藤慎爾編(光文社文庫)	光文社	2003.4	090.4/K42-68//H
65	夏の終り	戦後短篇小説再発見11 事件の深層(講談社文芸文庫)	講談社	2003.6	新書・文庫コーナー//H
66	ヴァンピールの会	怪談 24の恐怖(三浦正雄編)	講談社	2004.9	090.4/K42-67//H
67	ヴァンピールの会	血と薔薇の誘う夜に 吸血鬼ホラー傑作選 (東雅夫編)(角川ホラー文庫)	角川書店	2005.9	090.4/K42-95//H
68	警官バラバラ事件	文芸ミステリー傑作選 ベン先の殺意(光文社文庫)	光文社	2005.11	090.4/K42-96//H

倉橋由美子をテーマにした学位論文

	論文名 / 著者	国名	言語	提出大学・提出年	所蔵先
1	Three Japanese women writers : Higuchi Ichiyo, Sata Ineko and Kurahashi Yumiko / Victoria Vernon Nakagawa	アメリカ	英語	Thesis (Ph. D.)--University of California, Berkeley, 1981	090.4/K42-102//H
2	Divine maiden : Kurahashi Yumiko's Seishōjo / Bertha Lynn Burson	アメリカ	英語	Translator's Thesis (Ph. D.)--University of Texas at Austin, 1983	University of Texas at Austin
3	The life and works of Yumiko Kurahashi / Kumiko Nakanishi	アメリカ	英語	Thesis (M.A.)--San Diego State University, 1987	San Diego State University
4	The uses of myth in modern Japanese literature : Nakagami Kenji, Ōe Kenzaburō and Kurahashi Yumiko / Faye Yuan Kleeman	アメリカ	英語	Thesis (Ph. D.)--University of California, Berkeley, 1991	090.4/K42-101//H
5	The intertextual novel and the interrelational self : Kurahashi Yumiko, a Japanese postmodernist / Atsuko Sakaki	アメリカ	英語	Thesis (Ph. D.)--University of British Columbia, 1992	090.4/K42-100//H

著書解題

バルタイ

一九六〇年は私にとって意外な相貌でおとすれました。受賞というアフェールが私の視界をどんなばら色に染めあげたか、これはやはりありふれたことばではいいあわせないものです。《バルタイ》は私が長いあいだ考えてきた問題を歪みの多いイメージをつかって組みたててみたもので、私のめざした《状況》とあのようなイメージの造型とが有効に結びつくかどうか、冒険的なことでもありました。その《バルタイ》が受賞作に選ばれたことに、私は当惑に似たうれしさをかんじます。作者の生み出したものが、作者のものでありながらもはや作者にも所有しきれない堅く充実した存在をもちはじめ、ぎゃくに作者に復讐するようになるという創作者の喜劇を私も実感させられているようです。そこで作者のとるべきみちは、あらたな勇気をもって《状況》にたちむかうこと以外にないとおもわれます。問題は《状況》をとらえる私のレンズを磨くことでこのレンズに血をかよわせ水々しく膨張させるためにも、いまの私に必要なことは、なによりもまず勉強することであろうとおもいます。今度の受賞というアフェールを私は私自身の決定的な《状況》としてひきうける覚悟を確認しながら、関係者のかたがたのご厚意に心から感謝いたします。



これは、1960年3月3日の『明治大学新聞』に寄せられた、倉橋由美子の「受賞の責任を痛感」というコメントである。

倉橋由美子の文壇デビュー作「バルタイ」は、1960年1月、第四回（昭和34年度）明治大学学長賞奨学懸賞論文・創作の創作部門に入選した。倉橋は、前年の第三回明治大学学長賞に「雑人撲滅週間」を応募、佳作第二席となっていたが、二度目の投稿作「バルタイ」は学長賞創作の部で三年振りにも出来た入選作であった。選考委員の一人平野謙は「非常にオリジナルな感覚が出ており、革命のイメージも独特なものがあり、これだけの小説が書ければ大したものだ。この作品なら何処に出しても通じると思うし、下手な文芸雑誌の小説より良く書けている。」と激賞し（『明治大学新聞』1960年1月14日）、同月『毎日新聞』の「文芸時評」欄においても、「バルタイ」を高く評価した。こうした平野の後押しを受けて、『文学界』3月号に転載され、中村光夫（『朝日新聞』1960年2月21日）や山本健吉（『読売新聞』1960年2月24日夕刊）からも秀作と評されている。



しかし、「バルタイ」は文壇において新たな形で注目されることとなった。それが、平野謙・丹羽文雄の間で行なわれた論争「バルタイ論争」である。平野謙は「新作家ひとり」（『新潮』1960年3月号）においても「バルタイ」を取り上げ、「現代文学の新しさ」があると発言している。これに対して、丹羽文雄は「小説家の感動する小説」（『群像』1960年4月号）を発表し、「現在の日本の文壇には、小説家の感動する小説と、批評家が云々する小説の相違が、あまり顕著になりすぎてゐて、そうした傾向の一つとして「バルタイ」に対する平野謙の批評を相上に上げた。「ただ感動をあたへてもらひたい」と語る丹羽は「「バルタイ」をよんでみて、私はそれほど感動もうけなかつた。上手な小説だと思つた。」と述べている。そして、平野に対して「平野君ばかりを相手にして気の毒だが、もう一度つきあつてもらはう。それは、平野君がつねづね現代文学の新しさといふことをいつてゐるからだ。それがどういふ意味か、私にはよく理解されなかつた。内容か形式か。」と疑問を投げかけた。これを受けて、平野謙は「丹羽文雄に答える」（『小説新潮』1960年5月号）で「小説家の小説のよみかたと批評家の小説のよみかたとを比較しながら」「その優劣を是非するようによめないでもない」と丹羽の態度を批判しつつもこの点にはあまり踏み込まずに、「バルタイ」は「最初から「感動」というような心情を拒否する地点に、作品全体が構築されてあるその即物的なスタイルに私は注目させられたのである。」と反駁した。



両者の論争は、これ以上の拡大を見せなかつたが、日沼倫太郎は、この論争を「本格的論争に発展すべき大問題をいくつかはらんで」おり、「現代批評の混乱を象徴する事件」として捕捉し、「現代の批評家が、おのれの認識とおのれの感性をつなぐいかなる通路も見出していないということは、言いかえるなら、真に認識と感性との均衡を土台とした、いかなる現代小説のイメージをも見出していないということだろう。」と総括した（『感動のイメージ』『バルタイ』論争是非』『批評』1961年冬季号）。

いずれにしても、倉橋由美子の文壇デビューは、本人の与り知らぬところで喧伝され、一躍脚光を集める結果となった。1960年8月には文藝春秋新社から第一作品集『バルタイ』が刊行され、同年の芥川賞候補となる。

冒頭に掲げた明治大学学長賞受賞のことばにおいて、倉橋は「バルタイ」が「作者のものでありながらもはや作者にも所有しきれない堅く充実した存在をもちはじめ、ぎゃくに作者に復讐する」作品となっていくことを早くも看取している。「バルタイ」からの出発は、倉橋みずから述べているように「勉強」することの必要性を痛感させ、さまざまなスタイルの作品を世に送り出した作家・倉橋由美子の生成に寄与したことは疑うべくもないだろう。

暗い旅

1961年に書き下ろし作品として発表された、倉橋初の長篇作品。「あなた」に呼び掛けるように語る、二人称の語り形式を持つ。二人称の形式がフランスの作家ミシェル＝ビュートルの「模倣」であるとの批判を受けたが、倉橋自身は「ビュートルから借りたのは二人称の形式よりもむしろ」「意識の断片を並べていくというやり方」であり、それが飽くまでも意図的な形式の借用、オマージュであると述べて、「物真似」、さらには「盗作呼ばわり」をした批評に対して反論した。倉橋自身は、この作品を「少女小説」と位置付けている。



聖少女

1965年9月に書き下ろし作品として刊行される。倉橋30歳のときの作品で、長篇としては2作目に当たる。前年2月に『新潮』に発表された短篇「わたしの心はパパのもの」を先行作品として成立する。倉橋自ら「最後の少女小説」と位置付けた。倉橋は、「わたしが近親相姦を小説に書くのは、これをいかにして聖化するか、という課題に魅力を感じるからなのです」と述べているが、この作品では、少女の「パパ」との近親相姦、少年の姉との姉弟相姦という二つの近親相姦関係を描き、その少女と少年の生と性が交錯するところに物語が生まれている。



反悲劇

1968年から1971年にかけて執筆、同6月に発表されたギリシャ悲劇をモチーフに用いた連作集。「向日葵の家」「酔郷にて」「白い髪の童女」「河口に死す」「神神があたごころの話」の五作品によって構成される。作者によれば、これは「本来反小説的である悲劇のミュトスを直接小説の中に『移植』する試み」であるという。その結果、これらの作品群は、悲劇に対する「反悲劇」のみならず、小説そのものに対する問いかけ、すなわち反小説たり得てもいる。



スマキストQの冒険

1969年4月書き下ろし作品として講談社より出版された。スマキ党員Qが革命工作の特殊任務を帯びて潜入したH感化院は、院長を筆頭に「観念の妖怪」たちによって構成された不条理極まる非日常の世界であった。誇張された非日常的な世界は、日常を逆照射しそのグロテスクな側面を浮き彫りにする。しかし、作者自身が「政治小説ではありません」と述べているように、物語は単なる風刺を超えた濃密な空気を創り出している。「バルタイ」と並んで初期の代表作と目されている作品。



夢の浮橋

1970年8月から10月にかけて、雑誌『海』に連載され、翌年5月に中央公論社より刊行された。以後、断続的に書き継がれる桂子さんを主人公とした作品群の一作目に当たる。そのタイトルが示唆するように、本作の物語世界は『源氏物語』『新古今和歌集』などをはじめとした古典文学に依拠しており、このスタイルは以後の倉橋作品に多く見られる。全共闘やswappingなど同時代の問題を織り込みながら、俳句や能などに親しむ優雅なclassに属する主人公たちに関かれた可能性としての「交換」の在りようを探り、親子二代にわたる夫婦交換と、それによる近親相姦の世界を描く意欲作。



ぼくを探しに

倉橋初の翻訳作品。1977年に出版された。原作者のシェル・シルヴァスタインはアメリカの作家である。「何が足りない」と感じた「ぼく」は、「足りないかけらを探しに行く」が……。倉橋があとがきに記しているように、この本は「シルヴァスタインの絵が最大の魅力となっている」。単純な描線でありながらも愛嬌のあるその絵は、自らの欠落した部分、“missing piece”を探すという普遍的なテーマと絡み合うことにより、独特の印象を生み出している。倉橋は、この作品を含め全部で七編のシルヴァスタイン作品の日本語訳を果たしているが、この「ぼくを探しに」には、続編として「続ぼくを探しに ビッグ・オーとの出会い」がある。



城の中の城

1979年1月から翌年10月にかけて『新潮』に掲載され、80年11月に単行本が刊行された。『夢の浮橋』以来、十年ぶりの長篇小説。二児の母となった桂子さんは、夫が無断で洗礼を受けていたことを知る。離婚を覚悟で夫に棄教を迫るといふ夫婦間の宗教戦争は、桂子さんの勝利で幕を閉じる。作者の意図としては「キリスト教であれ、マルクス教であれ、そんなものを粉碎するといふ使命感に」よって書かれた「反キリスト教文学」ではなく、桂子さんが「自尊心」を守るべく「敢然と戦ふ」姿勢を描いた「ごく普通の小説」であった。また、この作品から「彼」「彼女」のような三人称を使用しないという試みをしており、同時代の純文学への痛烈な批判意識を内包している。



大人のための残酷童話

1982年5月から翌年12月にかけて雑誌『波』に連載され、1984年4月に新潮社から単行本として出版された。『白雪姫』や『一寸法師』といった日本の子どもたちにお馴染みの童話から谷崎潤一郎の『春琴抄』、フランツ・カフカの『変身』まで様々な物語を倉橋なりにアレンジした。この本の出版により「童話ブーム」が起こったと言ってもいいだろう。倉橋があとがきで「お伽噺の世界」は「因果応報、勧善懲悪、あるいは自業自得の原理が支配している」「残酷なもの」と言っていることから分かるように、児童向けに稀釈され、お伽噺本来の毒を失った姿の物語を著者は否定し、人間という存在に目を逸らすことなく、そのありのままの姿を描くことを果たしている。単行本化に伴って、各話に倉橋自身による「教訓」が付されている。



アマノン国往還記

1986年8月に書き下ろし作品として刊行される。男を全く必要とせず、男は生殖のための道具と化した完全母権制国家のアマノン国。一神教国家であるモノカミ国から宣教師としてアマノン国に派遣されたPは、男性の復権を求めオッス革命を展開していくが……。果たしてアマノン国とは何なのか、謎が謎を呼ぶミステリー仕立ての奇想天外なSF長編大作。巻末には付録として「アマノン語辞典」が載せられており、倉橋独特のユーモアとアイロニーに溢れた一冊となっている。倉橋は、この作品で泉鏡花文学賞を受賞した。



夢の通ひ路

1987年から1989年にかけて執筆、同11月に発表された作品集。表題作「夢の通ひ路」等二十一作品によって構成される。いわゆる 桂子さんシリーズ に連なる作品であり、桂子さんを中心にした物語が大半をしめる。西行、式子内親王、定家、西脇順三郎等を相手に「こちらの世界」と「あちらの世界」を自由に往来し、そのあわいに幻想的で甘美な世界が出現する。「あちらの世界」との往来を掌篇連作の形式で綴っていくスタイルは後の「よもつひらさか往還」にも継承されている。



ポバイ

1987年7月、NHK・FMのラジオドラマのために書き下ろされたものを、同年8月、雑誌『海燕』に発表。9月に福武書店より単行本化された。『倉橋由美子の怪奇掌篇』中に収められた「アポロンの首」との類縁関係がみられる。元首相入江氏の邸宅に乱入し切腹したテロリストの生首ポバイを、入江氏の孫舞が世話をする。発声のできないポバイと脳梗塞で倒れ言語障害に陥った入江氏。ともに発話の代替としてのキーボードによる、奇妙な交流が二重奏のように描かれる。サロメのような美的世界を想起させつつも、技術の進歩が為し得る究極の延命を描き、その不気味さが剔抉される。



交歓

1988年1月から1989年4月まで『新潮』誌上に連載され、同年7月に新潮社より刊行された。出版社社主として知識人たちの集まる「サルーン」の女主人的存在になっている主人公の桂子さんは夫の死後残されたフロッピーと、夫をめぐる女性たちを冷静に解析しつつ、財界の大物・入江氏との間に新たな親交を結ぶ。政財界の中心人物となる入江氏と文化を創造する立場にある桂子さんの「交歓」による「プロジェクト」へと結実する物語は、中国の漢詩や俳句、ギリシア神話などを下敷きにしつつ、『夢の浮橋』以来一貫するclassの主題をより明確に打ち出している。



よもつひらさか往還

『サントリークォーターリー』に「Cocktail Story 酔郷譚」として1996年から21回にわたり連載されたうちの、15回分を2002年に単行本に収録したものである。入江氏の孫慧くんが、クラブのバーテンダー九鬼さんの作るカクテルによって時空を超え、さまざまな美女との戯れを愉しむ。東西の古典文学を下敷きとした冥界との往還は、夢幻的な世界を繰り広げており、作者の本領が遺憾なく発揮されている。



新訳 星の王子さま

サン=テグジュペリ原作、2005年7月発行、翻訳後に急逝した訳者の遺稿となった。本作は岩波版の内藤濯訳が有名だが、2005年1月版権が消滅し、池澤夏樹等多くの訳者によって「新訳」が発行された。倉橋訳の特徴は、自身があとがきで述べているように「これはあくまでも、大人が読むための小説なのです」ということであろう。一人称が「ぼく」から「私」へと変更され、より簡潔で硬質な文体で綴られる文章は、孤独な大人の「世界で最も悲しい物語」としての側面を強調する。



倉橋由美子研究・論評等

執筆 者	論 題	『書名』、『掲載誌』巻(号)	出版 社	出版 年	所 蔵 先
1 平野謙	今月の小説(下)	『毎日新聞』	毎日新聞社	1960.1.29	N/2//H M/352//H
2 平野謙	新作家ひとり	『新潮』57(3)	新潮社	1960.3	P905/7//HZ P905/2//W
3 丹羽文雄	小説家の感動する小説	『群像』15(4)	講談社	1960.4	P905/2//HZ
4 平野謙	丹羽文雄に答える	『小説新潮』14(7)	新潮社	1960.5	P913/1//HZ P913/1//W
5 高野斗志美		『倉橋由美子論』	株式会社サンリオ	1976.7	910/2061//W 910.28/620//HZ
6 特集・倉橋由美子	とにかく、刺激的な(秋山駿) 詩的カスト制の運命(磯田光一) 意識神話(高橋英夫) 記号の戯れあるいは喜劇の可能性(宇波彰) 美の遍歴者 倉橋さんへの手紙(森川達也) 否定と詐術の文学(饗庭孝男) ナルシスと清少納言(荒木亨) 多すぎる蜘蛛の脚 愚行を見わす眼の問題(高野斗志美) 女性的前衛小説について(山野浩一) 「沈黙」に至る旅(松浦理英子) Dへの手紙(今泉文子) 放恣な禁欲 「倉橋由美子」を斜めに読む(高橋和久)	『コリイカ』13(3)	青土社	1981.3	090.4/ K42-91//H
7 田沼武能	倉橋由美子 昭和35年7月16日 *明大教室内での写真	『文士の肖像』(とんぼの本)	新潮社	1991.9	910.2/1227//H
8 中山和子	批評の荒野 1960 *『昭和文学研究 39』(1999.9)所収「批評の荒野 1960 「バルタイ」から「囚人」まで」	『中山和子コレクション 平野謙と「戦後」批評』	翰林書房	2005.5	910.2/803-3//H 090.4/N25-7//H 910.2/923-3//W
9 追悼・倉橋由美子	「クラハシ」という胸おどる文学的記号(小池真理子) 聖少女に幻惑されて(松岡正剛) 四十五年の誤読(清水良典) 倉橋由美子氏との三十年(古屋美登里)	『文學界』59(8)	文藝春秋	2005.8	P905/1//H P905/3//W
10 追悼 倉橋由美子	倉橋由美子さんと心臓の音(加賀乙彦) 倉橋由美子回想(関川夏央) 天真爛漫な「鬼女」(清水良典)	『群像』60(8)	講談社	2005.8	P905/2//H
11 追悼 倉橋由美子	悼 倉橋由美子さん(北杜夫) 最後の小説(古屋美登里) 冥界の「ボレロ」(小島千加子)	『新潮』102(8)	新潮社	2005.8	P905/7//H P905/2//W
12 村松友視	倉橋由美子さんが「自然体」を貫いた女性文学者(蓋棺録) *1960年頃、明大内での写真掲載	『婦人公論』1182	中央公論社	2005.8	UNBOUND///H UNBOUND///W
13 小山鉄郎	翻訳家・古屋美登里さんが語る作家・倉橋由美子(文人往来27)	『高知新聞』	高知新聞社	2005.12.20	共同通信社提供
14 野上透、根岸基弘	倉橋由美子 *1971年10月4日 相模原市の自宅での写真	『文士一瞬 - 野上透写真集』	柏駒舎	2006.1	910.2/208//H 910.2/1190//W

遺品等

(所蔵先)特記なきものは、ご遺族からの提供による。

1 自筆原稿	無気味なもの美しいもの 『円地文子全集』月報(1977.11)
2 自筆原稿	シルヴァスタイン『続ぼくを探しに ビッグ・オーとの出会い』(講談社 1982.7)の翻訳
3 校正ゲラ	『倉橋由美子全作品 1』(新潮社 1975)再校
4 授業ノート	英語、文法[文語](富田先生)、世界史(町田先生)、化学(三枝先生) *土佐高等学校3年のもの
5 第4回松前総長杯争奪全日本学生弁論大会プログラム	本学生弁論大会プログラム *審査員、書き込みあり
6 スクラップブック	No.1「バルタイ」、No.2
7 表彰状	泉鏡花文学賞 昭和六十二年十一月二十日 金沢市長江川昇 選考委員・井上靖ほか 付:記念品 得能節朗作銅鏡
8 表彰状	マンボウ賞 昭和六十一年十月十一日 マンボウ・マブセ共和国主席 北杜夫
9 落款	「由」 *サインの際に、特に愛用していたもの。
10 辞典	金田一春彦、池田弥三郎編『学研国語大辞典』(学習研究社 1979.11 第8刷) *普段から調べるのが好きで、たくさんの種類の辞書を家に備え付けていた。本書は座右に置いて、気軽に使用していた。付箋も使用していたそのままである
11 肖像写真	1987年6月(新潮社提供) *当リーフレット表表紙
12 写真	誕生四ヶ月後(講談社提供)
13 写真	小学校一年生のとき(左)。胸に級長賞(講談社提供)
14 写真	1967年、ニューヨークのサウスフェリーボートで。撮影・熊谷富裕(講談社提供)
15 写真	1977年2月 東京・玉川学園にて、次女、古屋美登里さんと(古屋美登里氏提供)
16 写真	北杜夫ガーデンにて 1986年10月11日 マンボウ賞表彰式、大岡信、星新一、佐伯彰一氏らと(新潮社提供)
17 ペーパーウエイト	バカラ、赤ハート型 *東海大学交歓の会が還暦の記念に贈ったもの
18 挿絵原画	山下清澄色彩銅版画(『大人のための残酷童話』新潮社 1984)
19 「婦人と暮らし」67 潮出版 1981.1	森村桂の「思い出との再会」その13 倉橋さん三年目の打ち明け話
20 「広報いせはら」308 伊勢原市 1982.12	倉橋由美子さん作詞の校歌碑
21 「クロワッサン」11(13) マガジンハウス 1987.7	3人の52歳が率直にみつめた私自身の老いと若さ 倉橋由美子さん
22 「ラ・セーヌ」3(1) 秀友社 1988.1	新春インタビュー特集「私らしさ」にこだわりたい 倉橋由美子さん
23 「クロワッサン」12(3) マガジンハウス 1988.2	太らないから、沢山食べても平気の、野菜料理 倉橋由美子さん
24 「マルコポーロ」3(7) 文藝春秋 1993.7	倉橋由美子 体制でも反体制でもなく、なぜ彼女は「バイブル」になったのか?
25 「新建築住宅特集」124 新建築社 1996.8	中伊豆の家 静岡県田方郡中伊豆町 *倉橋氏の、「これまでの家族との一緒に生活リズムから離れた、自分だけの新たな創作の場と、その場がそのまま自分の墓場になるような空間」との求めにより、当時、大学院生であった次女(現・一級建築士)が卒業制作にて設計。1996年2月竣工(所蔵先 P527/5//S)

第14回 明治大学中央図書館企画展示
明治大学特別功労賞受賞記念
倉橋 由美子展

編 集：明治大学中央図書館ギャラリー企画運営WG
書誌調査・解題執筆：田中絵美利、川島みどり、朝岡浩史、鈴木淳
資料提供：故倉橋由美子氏ご遺族、古屋美登里氏、積田正弘氏、新潮社、
講談社、宝島社、共同通信社、日本著作権輸出センター、
University of Texas at Austin、San Diego State University
後 援：明治大学連合父母会、明治大学校友会、連合駿台会
発 行：明治大学（東京都千代田区神田駿河台1-1）
発 行 日：2006年6月5日
制 作：(株)サンヨー